

巻頭言

激動の世界と向きあう — 平和の礎となる大学院教育をめざして

内 藤 正 典

2012年3月に、グローバル・スタディーズ研究科は初めての博士前期課程修了者を送り出した。13年3月には博士後期課程も完成年度を迎える。この一年間に、研究科は大きな意味のある国際会議をいくつも開催した。一つは12年6月27日に開催した「アフガニスタンにおける和解と平和構築」である。この会議では、反政府勢力タリバンが初めて公式代表団を国外に送り、政権側と同じテーブルについた。直接対話にまでは至らなかったが、他の反政府勢力の代表、カルザイ大統領の側近と共に、平和構築に何が必要かを述べたのである。ニュースはその日のうちに世界を駆け巡り、New York Times や Wall Street Journal が一斉に報じた。およそ二週間後には日本でアフガニスタンの復興支援に関する「東京会合」が開催される予定だった。世界は、衝突の続くアフガニスタンで、初めて和平へのかすかな光明をみだし、支援の継続を約束したのである。

9月22日には、日中国交回復40周年を記念するシンポジウムがNIHU（人間文化研究機構）との共催で開催された。同志社大学で開催した京都大会では、「日本と中国：何をどう学びあってきたか—文化と女性の視点から」と題して、両国の日常世界のなかで、互いの文化をどのように受容しているかが論じられた。尖閣諸島問題で国家間の関係が冷えこむなかで、当研究科が、決して断絶することのない両国の文化を女性の視点をまじえて考究する姿勢を示したことは重要な成果となった。

10月には、文部科学省による博士課程教育リーディング・プログラム（リーディング大学院）に、当研究科から申請した『グローバル・リソース・マネジメント』が採択された。採択プログラム23件のうち、私学は2件のみであった。設置後間もない研究科が、博士課程教育をリードする大学院と位置付けられたことは快挙と言ってよい。このプログラムは、当研究科と理工学研究科が基幹研究科となり、他に連携研究科の参加を得て2013年度から本格的にスタートする。理工系のインフラ工学、資源・エネルギー工学と人文・社会科学系の開発、紛争抑止、平和構築、人間の安全保障などをジョイントさせる文理融合型で、複合領域の「多

文化共生社会」部門で選ばれた。理工系の学生がグローバル・スタディーズを学び、人文・社会科学系の学生は電気、水、道路など生活基盤を構成するインフラの工学的基礎を学んでいく。大学全体で取り組む国際化拠点形成のための「グローバル人材育成推進事業」とならんで、同志社大学の研究・教育がグローバル社会のなかに地歩を固めていく一歩となることを期待している。

11月には、今出川キャンパス博遠館から新たに完成した烏丸キャンパスの志高館に研究科全体が移転した。志高館には国際衛星放送の受信設備の他、国際会議やゲストへのインタビューを録画して発信する設備も完成し、学生自身の手で研究成果を世界に問う試みも、いずれ実現することだろう。研究科には、中国、アフガニスタン、キルギス、トルコ、イラン、インドネシア、ネパール、パレスチナ、フィンランドなどさまざまな国から留学生を迎え、ますますグローバル・スタディーズの名にふさわしい多様性を備えつつある。京都に居ながらにして、世界の諸課題を考える環境は整ってきた。次は、京都から世界へと羽ばたき、日々の暮らしの中で困難に直面する人びとに寄り添い、その声にじっと耳を傾けるところから問題解決への知をはぐくむ実践的な教育の実現をめざしていきたい。